
童話『幸福の王子』はなぜ「幸福」と言えるのか

深澤 清*

はじめに

アイルランド出身の作家 Oscar Wilde (Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde, 1854-1900) には、*The Happy Prince and Other Tales* (1888) と、*A House of Pomegranates* (1891) という2つの童話集があり、これから論じる童話 'The Happy Prince' (『幸福の王子』) はタイトルの一部になっている前者の著作に収められている。後で言及することになる Oscar Wilde の父 William の影響もあって、Oscar の頭の中には膨大なアイルランドの民間伝承の物語が蓄積されており、人々が集う時には話のエッセンスを縫い合わせて独創的な物語を話したと言われていた。また、大判ノートに書いた話を二人の息子のベッドに持ち込んで、Oscar は毎晩のように子どもたちに読み聞かせをしていた。自分の息子たちのために書いた話とはいえ、これらの童話は寓意に満ちており、単に子どもを幻想の世界に導くためのものではないことは明白である。事実、ワイルドは読者からの質問に対して、「これらの物語は、ロマンスに仕立てるために空想的な形の中に入れた散文の作品なのです。半ばは子どものために、半ばはこどものように驚いたり喜んだりする能力を失わず、微妙で不思議なものの中に単純さを見つけれられる大人のために書かれたものです。」と答えている。

さて、素朴な疑問かもしれないが、童話 'The Happy Prince' に込められた幸福感なり、幸福の価値基準なりを、読者はどこに求めたらいいのだろうか。話の中に登場する彫像の純金箔は一枚一枚はぎ取られて最後は地金だけとなってしまい、溶鉱炉でも溶けなかった鉛の心臓はごみ捨て場に投棄されてしまう。そのような悲しい話に、一体、どのような「幸福」と呼べるものが存在するのだろうか。唯一の救いと思われるのは、天使によって王子の鉛の心臓とツバメの亡骸が神のもとに届けられたという、キリスト教的な来世思想のみである。なるほど王子は生前、「無悲宮殿」(サン・スーシー宮殿) に住み、廷臣から「幸福の王子」と呼ばれていたため、それを指して "the Happy Prince" であるとする考えもあるが、童話の意図するものはそのような単純なものではないだろう。やはり重要だと思われる箇所は最後に示された昇天の場面であり、そこに何らかの寓意性があることは間違いない。童話を解釈する場合、いわゆる「シェイクスピアの洗濯代金請求書」の発掘にうき身をやつすことは、作品そのものの魅力を失わせることになるであろうし、また、I・A リチャーズの言う「ゆたかな調整された反応」を読者に惹起させることはできないであろう。本稿ではどの程度まで童話の魅力を損なうことなく論じることができるのかわからないが、これから童話 'The Happy Prince' に込められた人間の「幸福」について述べてみたい。

* 一般教育 教授 英文学

童話の背景と黄金 (gold) が意味するもの

この童話は“High above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince.”という情景描写から始まる。読者はまるで絵画を見る時のように、青いサファイア、腰の剣の真っ赤なルビー、そして純金で覆われた王子の彫像などを思い描き、物語の世界に引き込まれていくであろう。町全体を見渡すことが可能な高台に載せられた王子の彫像は、貧しくて苦しい生活を強いられていた民衆の姿を目にすると哀れに思い、〈まずしき者に与えよ〉という聖句の教えを実践していく。この「幸福の王子」の慈愛的な行為に対しては、まず、Oscarの父親であるSir William Wilde (1815-76)の姿を重ね合わせることはできないか。William Wildeは民間伝承の宝庫であるアイルランドのRoscommon郡出身で、眼科医・耳科医として有名であるばかりか、自らの足でアイルランド各地をまわり、失われつつあったアイルランドの民間伝承の採話をして、例えば*Beauties and Antiquities of the Boyne, and its Tributary* (1850) や、*Irish Popular Superstitions* (1852)などを出版している。Williamは貧困のために医療費を払うことができない患者に対しては無料で診察をしたり、患者に民間伝承の物語を話させたりして、医療費を免除したこともあった。Williamの伝記については資料不足ということもあってスキャンダルな面が強調されやすいが、Williamがアイルランドの文芸復興運動の礎を築いたことは再評価すべきである。Williamがアイルランドの民間伝承を後世に残すことに使命感を抱いていたことは、Williamが著した*Beauties and Antiquities of the Boyne, and its Tributary*の序文にある記述からも明らかである¹⁾。この著作はどのページも隙間なく文字で埋め尽くされ、些細なことでも漏らすまいとする著者の情熱が感じられる。また、採話した場所のスケッチも描かれており、絵の技量もかなり優れていることがわかる。

アイルランド民間伝承の物語に精通したWilliamとともに、息子Oscarは幼い頃から学校の休暇を利用してはアイルランドGalwayのCorrib湖畔にある別荘や、Connemaraのフィッシング・ロッジを訪れて、アイルランドの自然に親しんでいた。息子との思い出深いこの土地に関して、Williamは1867年に*Lough Corrib and Lough Mask*を出版している。大自然を背景にして、民間伝承の話を語る吟遊詩人シャナヒーとその物語に耳を傾ける人々の姿は、Oscarにも大きな影響を与えたことは間違いない。Oscarにとってこのような理想郷は、詩的想像の世界を生み出すための源泉となったはずである。この理想郷は後に出版する戯曲*The Importance of being Earnest*の中で展開される“bunbury”という、田舎と都会での「二重生活」を意味する造語にも繋がり、“bunburism”という言葉はやがてイギリスの「ジェントルマン」と呼ばれる社会階層を揶揄するための文学的な武器となっていった。

1874年、OscarはDublinのTrinity CollegeからOxfordのMagdalen Collegeに留学し、その2年後に父Williamが死去する。Oscarがイギリスに留学した理由は定かではない。数年前、筆者はアイルランドのダブリンにあるTrinity Collegeの図書館(古文書室)で調査を行った際、Trinity College在学当時のOscarの学業成績簿を閲覧したが、一般的に言われていることとは異なり、Oscarの成績が特に優秀であったという印象は受けなかった。むしろ気になったのは、メモ書き程度に余白に書かれた“Sizzle”という記載であり、金銭面で学業を維持するのが難しかった様子が伺える。当時、父William Wildeの女性問題を契機と

する Wilde 家の名誉の失墜およびその裁判費用支出のために、Wilde 家は多額の負債を抱えていた²⁾。別荘を含めアイルランド国内に所有していたすべての土地・建物が抵当に入り、Oscar 自身も経済的に追い込まれていった。このような四面楚歌の中で Oscar はアイルランドを離れ、イギリス社会で自己実現を目指していく。「我々は強烈な個性、野心の時代に生きている。そして世間に私のことを理解させよう³⁾」という言葉に、その決意が示されている。Oscar はネロカット、メロヴィジャンスタイルとポヘミアンネクタイ、ひまわりの花を手にとりソープ通りを遊歩したと言われ、その目的は服装による個の表現であり、道徳主義で固まったヴィクトリア朝社会に対する一つの挑戦でもあった、というのが一般的な考え方である。しかし、それらはむしろ目的達成のための手段であり、祖国アイルランドを離れ、異国の地イギリスで歯を食いしばって生きなければならない理由があったという事実を、ここであらためて強調しておきたい。

祖国アイルランドと決別したかに思えた Oscar Wilde であったが、1881年12月から始まったアメリカへの講演旅行は、別なかたちで Oscar に祖国アイルランドのことを再認識させる結果となった。つまり、アイルランドの大飢饉のために祖国を離れ、アメリカへの移住を余儀なくさせられたアイルランドの人々との出会いである。Oscar の母 Speranza の息子がやって来るということで、各地の講演会場はアイルランド系の人々で埋め尽くされたという。1845年頃から始まったアイルランドの大飢饉。天候不順による穀物の不作に続き、ジャガイモの胴枯れ病が流行して、各地では主食のジャガイモがほぼ全滅状態であった。アイルランドは当時、人口の70パーセントが農民であり、しかもその大半はイギリス本国にいる地主貴族から土地を借りて生産をする小作人であった。不作で収穫がなくても地代の支払い義務は残り、わずかに収穫した小麦さえその地代としてイギリスに運ばれていく。食料もなく、地代も稼ぐことができないアイルランドの人々にとって、生き延びるための唯一の手段がアメリカへの移住であった。当時、Oscar の母 Speranza は貧困に喘ぐ民衆の声を代弁して文筆活動に努め、市民運動を展開していた。Speranza が 'The Famine Year' という詩の中で描いたのは、大飢饉で食料がなく苦しい状況下にあったアイルランドの農民たちである。以下にこの詩の第1章を引用して、その試訳を添えておく。

I.

WEARY men, what reap ye?—Golden corn for the stranger.
 What sow ye?—Human corpses that wait for the avenger.
 Fainting forms, hunger-stricken, what see you in the offing?
 Stately ships to bear our food away, amid the stranger's scoffing.
 There's a proud array of soldiers—what do they round your door?
 They guard our masters' granaries from the thin hands of the poor.
 Pale mothers, wherefore weeping?—Would to God that we were dead—
 Our children swoon before us, and we cannot give them bread.⁴⁾

I.

やつれた人々よ、何を刈っているのだ?—よそ者にやる貴重な麦さ。

何を植えているのだ？—復讐の機会を狙う人間の死骸さ。
弱々しく空腹に打ちひしがれた姿で、沖合に何を見ているのだ。
よそ者があざ笑う中、俺たちの食料を運んでいく立派な船さ。
敵めしい兵士の隊列—戸口を囲んでどうするというのだ。
痩せ細った貧乏人の手が触れぬよう、奴らは主人の穀物倉を見張っているのさ。
青ざめた母親よ、なぜ泣いているのか？—神様、どうかお助けください—
子どもたちが倒れても、パンの一切れさえ与えることができないのです。

引用の詩1行目にある“Golden corn”は「貴重な小麦」と訳したが、Goldenという言葉には「黄金色」の意味と、貨幣価値を持つ「金貨」の2つのイメージが重ねられている。また、2行目の“sow”は「種をまく」という意味であるが、イメージ的にはジャガイモの「種芋」を植えているようである。ジャガイモはアイルランドの痩せた土地でも生育が可能であるが、詩の中から読みとれることは、その種芋さえ手元にはなく、農民の仕事といえば復讐の機会を狙う死体を埋葬することだけである。

繰り返しになるが、Oscar Wildeがアメリカ講演旅行で出会った人々は、まさにこの詩の中に登場する農民たちであり、又アメリカへの移住を余儀なくされたアイルランド系の人々であった。特にOscarの父Williamは医者としてアイルランド国内における食料飢餓の実態調査をしており、飢饉の悲惨さについては息子Oscarにも伝えられたであろう。大飢饉にもかかわらず、目の前にある小麦がイギリスに送られていく。人が人を餓死させる恐怖。人が人を死に追いやる現実。この悲惨な現実に対する憤りは、父William、母Speranza、そして息子であるOscarの著作へと受け継がれていった。例えばOscarの童話‘The Young King’の第5章には、先に引用した母Speranzaの詩‘The Famine Year’と同じような情景描写がある。

‘In war,’ answered the weaver, ‘the strong make slaves of the weak, and in peace the rich make slaves of the poor. We must work to live, and they give us such mean wages that we die. We toil for them all day long, and they heap up gold in their coffers, and our children fade away before their time, and the faces of those we love become hard and evil. We tread out the grapes, and another drinks the wine. We sow the corn, and our own board is empty. We have chains, though no eye beholds them; and are slaves, though men call us free.’

(下線部は筆者の加筆によるもの)

「戦争の時には、強い者が弱い者を奴隷にするし、平和な時には金持ちが貧乏人を奴隷にするのさ。あいつらは生きていけないぐらいの賃金しか与えはしないんだ。俺たちは、あいつらのためにくたくたになるまで働いて、あいつらは金庫の中に金をどっさり積み上げている。それなのに、俺たちの子どもは盛りの時期を前にすっかり弱ってしまうし、俺たちが愛している者たちの顔はこわばって、悪魔ようになってしまう。俺たちはブドウを踏み搦っているのに、そのワインを飲むのは別なやつらだ。麦の種をまい

でも、俺たちの食卓はからっぽさ。誰も見えやしないが、俺たちは鎖につながれている。俺たちは奴隷なのさ。人は俺たちのことを自由と呼ぶけどね。」

引用部に波線で示した戦争時の“the strong”と“the weak”とは、イギリスとアイルランドの両国家とその国民を、そして平和時の“the rich”と“the poor”は、それぞれイギリス国内の地主貴族とアイルランドの小作農民を意味するであろう。両親と同様に、Oscar は弱者に対する救済の必要性を訴える。さらに、引用部に実線下線で示した“they heap up gold in their coffers”の中の“gold”とは、貨幣としての「金」というよりは、むしろ食料である「小麦」の意味の方が強い。なぜなら、その後には“and our children fade away before their time”と続くからである。引用の詩の最終行にある“free”という語は先述の通り、イギリス国内の地主貴族から土地を借りて生産をするアイルランドの小作農民を示しており、生活の保障がないことを意味している。次の引用文にも関係するが、見方を変えれば仕える人の存在があるからこそ、生活が成り立つとも言えるのである。

童話‘The Young King’の「若い王」は、「金持ちと貧乏人は、兄弟ではないのか。」と問いかけて人々に博愛精神の重要性を訴えるが、群衆の中からひとりの男が歩み出て、「若い王」に向かって次のように言った。

“Sir, knowest thou not that out of the luxury of the rich cometh the life of the poor? By your pump we are nurtured, and your voices give us bread. To toil for a master is bitter, but to have no master to toil is more bitter still...”

「王さま、金持ちが贅沢をするので、貧乏人の生活が成り立っているということを知らないのですか。あなた様の栄華によって、我々は養われているのです。あなた様の悪徳が、我々にパンを与えてくれるのです。主人のために、あくせく働くことは辛いことですが、あくせく働いてやる主人がいないことの方が、もっとつらいのですよ。」

人生において“free”であることは良いことのように思われるが、逆に“free”であることが生活の基盤を失うこともある。やがて、「若い王」は人々がお互いに愛し合い、平等に富の分配を行って貧富の差をなくすことが現実的には難しいことを悟った。悩み苦しむ王に向かって老司教は「この世の重荷は、ひとりの人間が担うには大きすぎます。この世の悲しみは、ひとつの心が耐えるには重すぎます。」と、進言した。

この「若い王」の姿に、Oscar Wilde は幼い頃の自分の姿を重ね合わせたことだろう。幼い頃、Oscar が両親と住んでいたアイルランド・ダブリンの Merrion Square 周辺地域は、いわばスラム化して貧困民で溢れていた。童話‘The Selfish Giant’の中では「わがままな巨人」が子どもたちを自分の広い庭から追い出して扉で囲っているが、その庭とは Oscar が住んでいた当時の Merrion Square 区域をあらわしている。その根拠となるものは Oscar が生まれた 1854 年当時のダブリン市内の建物評価図にある⁵⁾。この評価図によれば、10 ポンド以下の老朽化した建物が Merrion Square をとり囲むように存在し、図式的にみても童話‘The Selfish Giant’で描かれている情景と極めてよく似ている。当時のダブリンの家々の窓

硝子は、現代でいうところの「アンティーク・レトログラス」とか、「昭和レトログラス」とか呼ばれるガラス素材に近く、外からは家の中の様子がぼんやりと見える程度であった。幼い頃、Oscarは貧困地域に住む子どもたちが Merrion Squareにある金持ちの家を覗く光景を目にして、「若い王」の発言と同様に貧富の差が生まれる理由を人々に問うたであろう。一方、Merrion Squareに住む住民の気持ちは、「わしの庭はわしのものだ。このくらいのことは誰にだってわかるはずだ。これから、わしの他はだれもこの庭で遊ばせないぞ」という、「わがままな巨人」の言葉によく表現されている。この世の貧富の差をなくすことはOscarが悩み続けた問題であったが、作家として唯一できることといえば、作品の中でその解決法を示すことぐらいであった。それは童話‘The Selfish Giant’において、「わがままな巨人」が庭の周りにめぐらした塀を壊し、子どもたちを自分の庭に入れて自由に遊ばせているところに表現されている。まさに〈貧しき者に与えよ〉という聖句の実践である。

1876年、Williamの死後、アイルランドの民間伝承に関する遺稿は妻であるSperanzaに受け継がれて編纂されて、それらは *Ancient Legends, Mystic Charms & Superstitions of Ireland* (1887)、そして、*Ancient Curses, Charms, and Usages of Ireland* (1890) として出版された。当初はOscarがこの編纂作業に関わる予定であったが⁶⁾、結局Speranzaがこれを担当することになった。おそらく当時、Oscarはアメリカ・カナダへの講演旅行中で多忙を極めており、編纂を担当する時間がなかったと思われる。Oscarは先述の通り2つの童話集を1888年と1891年に出版しているが、奇しくもこれらの出版年はSperanzaの書籍の翌年である。Oscarの童話の題材は母Speranzaが編纂した民間伝承の物語にあり、またそれを遡れば、父Williamが遺した膨大な資料にあることは明らかである。Oscarの童話と母Speranzaの物語との類似性を示すため、具体例としてSperanzaの‘The Priest’s Soul’という話をとりあげる。この物語のあらすじは以下の通りである。

幼い頃から弁術にすぐれた少年がいた。両親の希望通りに牧師になったものの、地獄、天国、神の存在を否定し、人々にもそのように教えてきたので、今や誰も死後の魂の存在など信じなくなった。ある時、天使が現れて牧師は24時間で死ぬことを告げた。命が救われる方法は、牧師が否定したはずの魂の存在を認めて、人々の中から1人でも魂の存在を信じる者を見つけることであった。しかしこれまでとは違う牧師の教えを信じる者はなく、もはや牧師の命もこれまでと思った時にある子どもが現れて、次のように言った。

“Then if we have life, though we cannot see it, we may also have a soul, though it is invisible,” answered the child.⁷⁾

牧師は自分の言葉を信じてくれた子どもの前で跪き、感激のあまり泣いてしまった。それから牧師はナイフをとり出し、これで自分の胸を刺すようにと子どもに囁願した。子どもは牧師のために祈り、牧師の希望を叶えた。全身の血が流れ出ても牧師はなかなか息絶えなかったが、やがて天使の予言通り24時間で死亡し、牧師の魂は蝶々のように昇天していった。

the butterflies are the souls of the dead waiting for the moment when they enter Purgatory, and so pass through torture to purification and peace.⁸⁾

この牧師が胸を刺されて血を流す場面には、Oscar の童話 'The Nightingale and the Rose' の "Nightingale" が、そして子どもの導きによって牧師の魂が昇天する場面には、Oscar の童話 'The Selfish Giant' の子どもたちの姿が浮かんでくる。このように Oscar の戯曲や小説では、誰かの導きによってある人が昇天する場面が多くあり、そこにはいわゆる民間伝承の話でいうところの「型」がある。同様に、Speranza の 'The Priest's Soul' における「牧師」と「子ども」の関係は、童話 'The Happy Prince' における「王子像」と「ツバメ」の関係によく似ている。さらに言えば、Oscar の小説 'The Canterville Ghost' における「幽霊サイモン」と「少女ヴァージニア」の関係も同様である。

先の引用文には「蝶々は Purgatory に入る前の死者の魂である」との記述があるが、Purgatory とは日本語で「煉獄」と訳され、カトリックの教義の一つとされるものである。もし「煉獄」の考えを Oscar の作品にも適用できるのであれば、Speranza の 'The Priest's Soul' における「牧師」、そして Oscar の童話における「幸福の王子」と小説の「幽霊サイモン」、三者それぞれの魂は罪の償いを果たすまでの苦行をなす場、すなわち「煉獄」に至る前の段階にあったといえるのではないか。苦行は人々の祈りと善行によって軽減され、浄化が終わると魂は天国に入ることになる。したがって、三者の対となる「子ども」、「ツバメ」、「少女ヴァージニア」は、煉獄に人々を導くための指導的な役割を担っていると考えられる。Oscar は晩年に投獄され、出獄後はセバスチャン・メルモスの名で作家活動を再開したが、日々の生活はまるで煉獄にあるかのごとき悲痛の連続であった。友人のロバート・ロスやアルフレッド・ダグラスが Oscar の心の支えとなり、天国への導き役となったことを思えば、これらの作品は Oscar の将来を予見させるものであったといえよう。「煉獄」の考えについては複雑な問題が絡み、ソラ・フィデの原理⁹⁾に合わないとして煉獄の教義に強く反対する宗教改革者もいる。煉獄の問題はともかく、Oscar は死の直前にプロテスタントからカトリックに改宗しているが、カトリックへの思いは Oscar が作家として創作活動を始めた初期の頃において、すでにあらわれている。

「幸福の王子」の幸福感とは

これまで述べてきたことを簡単にまとめれば、Wilde 家の 3 人が共通に抱いていたものとは、生活が貧しい人々に対する同情心と悲哀の精神であった。Oscar の父 William はアイルランド各地方に伝わる民間伝承の採話を通して文化的遺産の保護に努め、また報酬を求めることなく貧しき者に医療を施し、大飢饉の時には医療行為を含め各地の実態調査をした。母 Speranza もアイルランドの民衆のために、いわばペンを武器として市民運動を行った。Speranza の詩と Oscar の童話 'The Young King' で示された "golden corn" とは〈小麦〉の意味であり、〈食料〉の象徴であった。

以上のことを踏まえながら童話 'The Happy Prince' について考えるならば、1. 黄金に輝く王子の彫像は、〈慈愛の精神〉をあらわし、2. 王子の全身を飾る貴金属類が貧しい人々に与えられるのは、富める者は貧困者を救うべきであるという〈人間愛〉を示すものである。3. 王子の身体を覆っていた gold (金) は〈小麦〉の象徴であり、ツバメによって〈食料〉としての黄金 (小麦) が人々に届けられた。4. 死後の王子の魂は罪の償いを果たすための

「煉獄」に入る前の状況にあり、ツバメの献身的な行為によって煉獄へと導かれた。さらに言えることは、5. 純金をすべて剥ぎ取られてみずぼらしい姿となった王子の姿は、大飢饉によって不毛の大地と化したアイルランドの〈国土〉を象徴するものであり、6. 彫像の地金の処理を話し合う市長や市議会議員たちは、〈イギリス〉と〈アイルランド〉の政治的な論争を示唆しているようである。

童話 'The Happy Prince' の概要は上記の通りであるが、次にこの童話に込められた「幸福」という問題について考えてみたい。動植物を含め、登場人物の立場によって幸福の価値基準が異なるが、ここでは「王子」と「ツバメ」に焦点をあて、二者の幸福感について考えることにする。まず、童話の流れに沿って両者の幸福感と思われるものを以下に列挙する。

- 王子： 1. 王宮という社会から隔離された範囲での〈快樂〉ではなく、悲しみに裏打ちされた真の人生の意味を知ったこと。
2. 物欲を捨て、他人への慈悲の心、すなわち〈布施〉の考えを持ったこと。

- ツバメ： 1. 仲間から離れることで「個」となり、未経験の異質なものに関心を持つようになったこと。「個」の楽しみ。
2. 王子の自己犠牲的な姿勢に心を動かされ、自分の命に代えても他者のために生きることの意義を知ったこと。

王子とツバメに共通する幸福感とは、一言で言えば己に付随するものをすべて捨て去り、他者のために生きるということである。いわゆる弁証法的手法は Oscar の作品を考える上でとても重要であるが、王子とツバメは相互依存的で相補的な関係にあり、二者は相互に規定しあうことで互いに成り立っている。すなわち王子の彫像が空間移動できない点はツバメが補い、ツバメの論理的思考の不足部分は王子の彫像が受け持っている。ものごとはそれのみで真理を完璧にする絶対的原理などあり得ず、まさに二者の関係はヘーゲルのいうところの「弁証法的止揚 (aufheben アウフヘーベン)」である。

ここで少し話が逸れるかもしれないが、童話 'The Happy Prince' の中に「マッチ売りの少女」についての言及がある。これは明らかにデンマーク人作家アンデルセン (Hans Christian Andersen) の童話である『マッチ売りの少女』(1848年)を意識したものである。Oscar の童話にはアンデルセンの作品を思わせるものが多くあり、さらにその先には哲学者キルケゴールの存在も意識される。

アンデルセンと哲学者キルケゴールは、ある時期、同じ文学サークルで一緒に活動をしていた。キルケゴールの処女作は『今なお生ける者の手記より一筆者の意にそむいて—S. キルケゴール刊行—小説家としてのアンデルセンについて—彼の最近作『ただのヴァイオリン弾き』をたえず顧みつつ』(1838年)という長いタイトルのものであるが、これはアンデルセンが前年に発表した第3作目の小説『しがないヴァイオリン弾き』(1837年)を厳しく批評したものであった。その後、アンデルセンとキルケゴールの応酬は続いたが、キルケゴールのアンデルセンに対する批判の内容は次のようなものであった。アンデルセンは貧しく苦しい生活を経て作家になったとはいえ、人の悲しみや苦しみを単純に考えすぎている。絶望

や貧困に極限まで追い詰められている人々の真の姿を忘れ、アンデルセンが人間の情に訴えるだけの短絡的な流行作家として君臨しているのが、キルケゴールにとっては許せなかったのである。

Oscar Wilde は「岡目八目」ならぬ、アンデルセンとキルケゴールの論争については知っており、またキルケゴールの主張する弁証法の問題についても理解した上で童話 'The Happy Prince' を書いている。『彷徨えるユダヤ人アハスヴェルス』の物語を思わせるキルケゴールの人生とは、まさに真理を求めての彷徨であった。「今なお生ける者」とは、「今なお彷徨い続ける者」を意味するのであろう。伝統的な教えや観念、思想に安住し、他人と同じことをして満足するのではなく、「私にとって真理であるような真理」を発見し、それに従って生きること。キルケゴールの生き方とはそのようなものであった。あえて茨の道を選び、真の自分を求め続けたのであった。

同様に、童話 'The Happy Prince' において、ツバメは仲間の群れから離れ、自分にとって真理となる道を選んだ。又、宮殿での王子の生活はいわば「快樂」であり、「幸福」とはかけ離れたものであった。「幸福」とは本来、「悲哀」に裏打ちされたものであり、王子は宮殿の外に出ること、つまり仲間から離れて「個」になることによって、初めて真の「幸福」の意味を知る機会を得たのであった。これは哲学的な術語では「より多くの生 (mehr Leben)」、さらには「生より以上 (mehr als Leben)」とでも言える方向が含まれている。

王子は自覚が深くなればなるほど、他の存在との一体性を意識せざるを得なかった。王子の彫像は高台に固定されて動きがとれなかったが、逆にそれが祈りの姿勢を強固なものにしている。王子は貧しい人々の悲哀を心の底から受け止めて、全身を覆う金箔を人々に与えているが、自分の差配には限界があることを悟った。通常の合理的な仕方では解決できない世の中の悲哀を知る時、それが何ものかはわからないにしても、王子は人間を超えたもの、世界を超えたものに対して〈祈る〉というかたちでかかわっていった。Oscar はこの王子の姿に、ゲッセマネにおけるイエス・キリストの祈りの姿を重ね合わせただろう。聖書にある、「わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ。されど我が意の儘にとはあらず、御意のままに爲し給へ」(マタイ伝 26・39) という言葉が示す通り、まず、イエス・キリストは毒杯を取り除くことを求めているが、神にかかわる中で「御意のままに」となり、祈りの中で祈りの質に変化が生じている。「王子の彫像」も祈りによって世界内の事柄への関わりが相対化され、より広く開放的で自由な世界に戻っていったのである。ケルト的にいえば、それは古代からの大霊に加わることであり、またキリスト教的にいえば、それは神のもとに還ることであった。

結論を一言でまとめれば、「幸福の王子」は、実は「幸福ではない王子」であった。否、「幸福ではない王子」だからこそ、「幸福の王子」でもあった。何やら禅問答のようになったが、「幸福の王子」の「幸福」という問題については、キルケゴールのいう「絶望とは死にいたる病である。自己の内なるこの病は、永遠に死ぬことであり、死ぬべくして死ねないことである。それは死を死ぬことである。」(『死にいたる病』) という言葉に総括されると思われる。世の中の人々は充実した瞬間を望みながらも、〈安定〉という言葉で自己満足し、ただ流れていくだけの人生を送ろうとする。キルケゴールはこれを「無精神性」と呼ぶ。見せかけの安定を何とかして埋めようとしながらも、人は自ら滅びの道を歩んでいく。「幸福の

王子」は王宮内では「幸福の王子」と呼ばれていたが、それは見方を変えれば「幸福ではない王子」であった。「王子の彫像」はキルケゴールの言葉でいうところの「無精神性」であり、純金の金箔は「見せかけの安定」の象徴である。しかし、純金を一枚ずつ剥離することによって、王子は「幸福ではない王子」から「幸福の王子」への移行が始まったのである。

人は愛するものに背を向けて、また自分を本当に愛してくれるものに背を向けて、いったいどこに向かおうとしているのか。迷える子羊の悲劇は、自分が迷っていることを知らないことにある。「幸福の王子」の悲劇もまた、真の幸福の意味を知らないことにある。「幸福」とは町全体を見下ろす程の高さになれば、逆にその足元の地中奥深きところに「悲哀」というものが存在しなければならない。意識を奥深きところまで深く潜行させ、それが悲哀の底といえるようなものにあって跳ね返った瞬間にこそ、真の幸福感が得られるのではないか。「王子の彫像」はこのことを自覚したからこそ「幸福」なのであり、それがこの童話に込められた「幸福」という意味である。ただし、「悲哀」と「幸福」は一体になるのだが、それは地上的な意味では実現が不可能である。だからこそ、王子の鉛の心臓と、小鳥の亡骸は天使によって神のもとに届けられたのである。

註

- 1) ...until very lately the great mass of Irish historic manuscripts was scattered and inaccessible. Many of these have, within the last few years, been collected together and several have been translated into English and published; but in forms which (though no doubt the very best) are not within reach of the general reader, neither would they be valued by such. To popularize these—to render my country—men of familiar with the facts and names in the Irish history—has been one of the objects I have had in view in the historic portion of this work. Materials for books of this description are now so abundant that the chief difficulty is in selection. (*Beauties and Antiquities of the Boyne, and its Tributary*, Tower Books of Cork, 1978. P. v-vi)
- 2) Williamの交際相手であった Mary Travers が名誉毀損で訴えた相手は Oscarの母 Francesca (Lady Wilde) であった。裁判では Mary が勝訴したが、Francesca にも同情する点を認め、賠償金額はわずか 1 Farthing であった。この裁判の結果、William の愚行が暴露されて信用を失い、体調不良により収入減となった。Oscar がアイルランドを離れた理由もこのような背景がある。
- 3) *Letters of Oscar Wilde*. Ed. Rupert Hart-Davis. New York: Harcourt Bruce & World, 1962. P. 146.
- 4) *Poems by Speranza* (Lady Wilde) Second Edition Glasgow: Cameron & Ferguson, London: 1871? p. 10.
- 5) Jacinta Prunty, *Dublin Slums 1800-1925 A study in Urban Geography*, Irish Academic Press, 1998. p. 50-51. Figure 2.6 の地図を参照した。
- 6) It is a great responsibility. I will not be idle about it. (*Letters of Oscar Wilde*. p. 20)
- 7) Lady Wilde, *Ancient Legends of Ireland* (Sterling Publishing, New York. 1996. p. 125)
- 8) *Ibid*. P. 126.
- 9) ソラ・フィデの原理とは、魂の苦行を伴うことなく、信仰心のみで魂が最後の審判で救われるという考え。これが免罪符の考えにつながった。